

後期学校関係者評価書

文責 教頭 半田 智徳

第2回学校関係者評価委員会

実施日 令和2年1月16日(木)

会場 校長室

参加者 評議員(5名) PTA代表(1名) 学校代表(3名)

I 学校から提案した内容

- ・自己評価結果
- ・児童アンケート結果
- ・保護者アンケート結果
- ・学校評価考察

II 協議された主な内容

学校評価考察をもとに、学校の現状(成果と課題)や取組等について情報を共有・協議し、学校・家庭・地域の連携協力により学校運営の改善を目指す。

はじめに

本校には「ベクトルをそろえる」という学校全体の基本方針がある。それぞれの教職員がいくら一生懸命にがんばったとしても、その向きがバラバラでは「学校」として大きな成果は望めない。それはまた、保護者や地域との関係においても同じことが言える。各自の個性やアプローチの仕方は尊重しつつ、チームとして目指すゴールに向かっていきたいと考えている。学校評価はそれを検証する貴重な機会であるにとらえ、そこから見えてくる見つけられる事実としっかり向き合っていく必要がある。

「A」(あてはまる)「B」(どちらかというにあてはまる)を肯定的意見、「C」(どちらかというにあてはまらない)「D」(あてはまらない)を否定的意見にとらえる。自己評価(教職員)はすべての項目について肯定的意見が100%となり、児童アンケートもすべての項目で80%を超え、更に保護者アンケートもすべての項目で91%を超えており、全体的にみておおむね満足できる状態であるといえる。また、ここ3年間の集計結果は多少の数値の変動はあるもののほぼ同じような結果になっている。ただ、そこから見えてくる課題を見つけ取組を進めていくことがさらなる高みを目指すためには大変重要なことである。

<考察の視点>

中央教育審議会答申(H28.12月)で教育課程改訂の方向性として「社会に開かれた教育課程」という提言がなされ、令和2年度には新学習指導要領が小学校で完全実施され学校を取り巻く状況はめまぐるしく変わろうとしている。答申では①より良い学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有していくこと。②必要な教育内容を教育課程において明確にすること。③学校と社会との連携・協働によりその実現を図っていくこと、の3点が示された。以前から、学

校・地域社会の連携の重要性を意識し取り組んできたが、これを機にさらに連携・協力を深めていく良い機会ととらえたい。「より良い学校教育がよりよい社会を創る」という考え方は「逆もまた真」で、「よりよい社会がより良い学校を創る」と読み替えることもできる。学校と地域社会が「Win・Win」の関係を築いていくことが「学校」にとっても「地域」にとっても大変重要だと考える。

<課題①>

自己評価（教職員）⑫ 「保護者・地域（及び関係機関）との連携・協力を努めていますか。」

保護者評価⑭「学校は、保護者や地域と連携・協力し、より良い教育活動を進めようとしていると思いますか。」

自己評価では肯定的評価は100%（A：67 B：33）で、前期比で10ポイント改善されている。また、保護者評価も肯定的評価は99%（A：64 B：35）と高く、否定的評価が前年度より改善（3→1）された。教職員については、「どれをもって連携と考えるか」という認識の違いはあるが、社会科・生活科・総合的学習の時間・自転車教室など各学年様々な形で地域と連携した学習が行われている。地域・保護者との連携ということ、幅広くとらえることによりさらに「連携の認識」を広め深めていくことができるのではないだろうか。「教育活動」は学校だけで完結できるものではなく、「保護者や地域」の協力なくしては成り立たない。今後も、連携協力を積極的に推し進めていく必要がある。

<課題②>

児童評価⑬「学校での様子を、家の人に話していますか。」

保護者評価①「お子さんと、学校の様子などを話していますか。」

児童評価の肯定的評価は82%（A：61 B：21）とまずまずではあるが、否定的評価18%（C：11 D：7）は気になる数字である。また、保護者評価も肯定的評価は97%（A：70 B：27）と高いものの、B評価は27%と課題を残している。保護者評価が比較的高いのと比べ、児童評価が低いことが気になる。実態がどうなのかは精査中であるが、児童が「あまり話していない」と感じているという点はやはり大きなポイントである。前期評価でも課題として挙げ、学校としては「音読を聞いてもらいサインを書いてもらう」「家の手伝いをしよう」など家庭学習を工夫し「学校がきっかけ」づくりをして改善を目指したが思うような変化がまだ見られていない。それぞれの家庭が抱える事情は様々であるが、家庭での会話を少しでも増やしていきたい。学校の様子を知ってもらうことや学校の教育活動への理解が進むことは、連携を深めていくためには欠かせないことである。

<課題③>

自己評価（教職員）⑥ 「基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を目指した指導に努めている。」

児童評価⑧ 「授業はわかりますか。」

保護者評価④「お子さんは、授業の内容がわかっていると思いますか。」

保護者評価⑦「学校は、基礎学力定着のために指導をしていると思いますか。」

自己評価の肯定的評価は100%（A：95 B：5）でA評価も高い。児童評価は肯定的評価が97%（A：69 B：28）と高いもののA評価が高くないことや否定的評価が3%あることは気になる点である。保護者評価④は肯定的評価が95%（A：48 B：47）と高いものの、A評価が低いことは気になる。ただ、昨年度は唯一A評価をB評価が上回っていた項目であるが、本年度はわずか

ではあるが A 評価が上回ることができた。保護者評価⑦も肯定的評価は 97% (A : 61 B : 36) と高いものの、B 評価が 36% と高く C 評価が 3% となっている。ただ、学力学習状況調査 (6 年) などの結果は、全国平均や県平均とほぼ同程度の状況であり決して学力が低いというわけではない。教職員と児童・保護者の到達目標点が違うのかもしれないが、児童にも保護者にもより学力が身についたと実感できるようにしていく必要がある。

<課題④>

今回は、第 1 回学校関係者評価委員会を受け、児童に「学校で一番楽しみなこと」について記述式のアンケートを取った。予想どおりと言えるかもしれないが、教科学習が楽しみだという回答と共に、休み時間や給食・友だちとのおしゃべりなどが多く書かれていた。数値では測れない児童の違った一面を垣間見る手掛かりになるのではないだろうか。

Ⅲ 出された意見

- 自己評価も児童アンケートも前期に比べ改善が見られ、学校が良い方向に向いていることが感じられる。
- 登校時のあいさつも大きな声で言えるようになり改善傾向にある。子ども達が学校生活を楽しんでいる様子がうかがえる。
- 心配なことがあり学校に相談すると、素早く対応してくれ、保護者や子供の声に親身に応えようとする姿がありがたいと感じた。
- 朝ごはんを食べて登校をする児童の割合が増え、とても良い傾向である。
- 習い事で忙しくする様子やゲームに多くの時間を割いている姿は心配である。
- 3 世代同居ということや地域のつながりを大切にするこの地域だからこそ、今の「東小」があると感じる。
- スクールカウンセラーの利用を促進し、様々なニーズの子どもに対応してほしい。
- 保健室や図書室が子どもの居場所になっているようで、安心した。
- 読書活動をさらに推進し、心を耕していくことが大事だと思う。

Ⅳ まとめ

ここ数年来「東小愛」という視点を前面に出し、「チーム東小」は日々教育活動を行っている。「東小の子どもたちのため」という思いは、学校も保護者も地域も全く同じである。自己評価も児童アンケート・保護者アンケートも今回もおおむね満足できる状態である。「地域の強い思い」「地域の教育力」を大事にし、お互いにコミュニケーションを図りながら連携を図っていくことが、「東小愛」につながっていくと確信している。学校・保護者・地域のベクトルの向を同じくし「徹底」して取り組んでいくことこそが、学校・保護者・地域の連携の一番の近道であると考えられる。ただその際の基本コンセプトとして、「ゆるやかな連携」(できる人が・できる時に・できる場所でのような考え)を念頭に取組、息の長い活動が求められる。そういった活動が必ずや、「よりよい学校づくり」「よりよい社会(地域)づくり」に繋がっていくはずである。